

第六節 築地小劇場への構想と準備

帝国劇場などの営利主義と低俗に失望し、震災の社会的衝撃も加わって苦衷の淵に沈む小山内薫を再起させたのは、フランス、ドイツ、ソビエトで演劇を学んだ土方与志の帰国である。大地震のほぼ四ヵ月後神戸港に着いた土方は大阪に住む小山内薫を訪ね、かつてふたりで夢想した小劇場を実現すべく、バラック劇場建設の構想を示した。

築地小劇場創設への準備（小山内薫「築地小劇場建設まで」）

そこへヨーロッパから土方が帰ってきました。土方はロシアを―赤いロシアを―通って帰ってきました。そして二カ年のドイツが一週間のロシアで解決されたと言いました。土方はこれからどうしようと言いました。私は土方の留守の間に私の経て来た心の動きを話しました。そして先ず東京へ行つて、今の東京を見て来いと言いました。

土方がどう東京を見たか、それはここには言いません。暫くすると突然土方がまた大阪の私の処にやってきました。そして吾々の劇場を建てようと思うがどうかと言うのです。バラック劇場の建設が許される。そしてここ五年間はそれを吾々の舞台とする事が出来る。本建築で吾々が劇場を持つという事はいつ出来るか

分からない。バラックなら吾々の劇場が持てるのだ。

吾々の劇場―自分達の研究劇場―それが持てるという事は、私にとって可なり強い誘惑でした。私は何も考えずに唯それだけの誘惑に引つ張られて行きました。「よし、やろう」私は直ぐに賛成しました。それがこの正月の三日でした。それからこの五ヵ月―それはすべてその為の準備に費されました。

準備と何ですか。先ず同志を糾合することでした。若い同志が集って来ました。毎日のように議論がありました。そして最後に組織せられた同人が、演出家としての土方と和田精と私と、俳優としての汐見と友田と、経営者としての浅利鶴雄とでした。この同人六人はこの劇場の経営維持に同じ程度の責任と義務とを持つものでした。土方の劇場でもないのです。小山内の劇場でもないのです。同人間には上下も軽重も階級もありません。劇場はこの六人で共有するものなのです。

敷地の選定、警視庁の許可、それにも二ヵ月以上の考慮と奔走とが費されました。建築のプラン、舞台設備の設計、観覧席の研究、それにも一ヵ月以上が費されました。今年一杯の演出目録の予定、同人以外の同志―その内には俳優もあり、照明家もあり、舞台装置家もあり、舞踊家もあります―が集められました。

議論又議論、熟読又熟読、一つのアンサンブルとしての基礎は漸く固くなって来ました。最初に俳優の基礎教育が始まりました。建築に就いて当局との交渉も円滑に進みました。四月二六日の朝、筑地二丁目の小さな敷地に縄張りが施されました。その後には武藤山治氏の二千人はいるという演説場が既に天を衝いています。その隣りには団十郎座の建築が既に計画されています。政界革新の機関に利用されようとする舞台と瀕死の吐息をつきつつある古典的歌舞伎劇の保存に供せられようとする劇場との間に介在して、吾等の劇場はそもそも何をするのでしょう。それはここには申しません。唯見て下さい。見ていて下さい。・・・

築地小劇場に於ける私は今までの私とは全く別のものでなければなりません。私はそれが為に幾多の批難を受ける事を予期しています。幾多の友人を失望させるに違いないと思って居ます。

私はもう単なる舞台の芸術家ではありません。私は一つの全人格としてこの劇場の中で働きたいと思っています。私は一個の芸術家であると共に一個の哲学者であり、社会学者であり、同時にまた民衆のリーダーであり社会改良家であるだろうと思います。私は自分の今まで持っていた、又自分に今までくっついていた総てのものから解放されたいと思います。その解放をこの劇場から求めるのです。私は生まれて始めて何者にも拘束されない自由な国をこの小劇場の舞台の上に見出だそうとしているのです。

今この部屋の上で、ゲーリングの『海賊』の稽古が始まっています。恐ろしい速度で弾丸のように詞が飛んでいます。大砲の響が時々家を動かします。神を祈る者があります。服従を否定する者があります。異常な情欲に燃える者があります。気狂いになろうとしている者があります。それは戦争です。しかもその戦争の行きつく処は何でしょう。――吾々は今戦争に直面しています。そして吾々の目的は何でしょう。弾丸が飛んでいます。火煙が上がります。砲弾は吾々を震撼しています。吾々は何処へ行くのでしょうか。誰も知りません。しかし、知っている者があります。少なくとも知っている者が一人はあります。①

築地小劇場の創設を喚起するかの如く、改造社編『大正大震災火災誌』に掲載された中村吉蔵の論稿は、大地震

① 小山内薫「築地小劇場建設まで」(『小山内薫演劇論全集』第二巻、四六一―四七頁。)

による劇壇壊滅を述べるに次いで、復興すべき新劇の理念を明確に提起している。彼自身が試作した『井伊大老の死』はつとに大地震の二年前市川左團次の主役にて歌舞伎座で上演され、米騒動から着想した戯曲『大塩平八郎』もやがて築地小劇場において第三年の演目に組まれる。

中村吉蔵「破壊前後の新劇」続(『大正大震災誌』)

破壊し去られた劇場を出来るだけ原形のままに再建したい、即ち復旧したい、その外面も、その内容をそのまま破壊前の遺業の承継であらせ度いというのが、恐らく興行当事者たちの願望ではあろう。そしてそれは多少の歳月を経たら、或いは遂げられて行くであろう。しかし、在来の興行当事者たちの手に支配された営利主義の劇場、即ち資本主義の傀儡であった演劇全体が、再び原形のままに復旧される事は、決して民衆の為に望ましい事ではない。又芸術の為に願わしい事ではない。破壊前に新劇が漸く發達期に向ったのは事実であるが、前已に述べた如くそれが到底奇形的な、変態的な傾向から離脱する事が出来なかった主要な原因の大半は、資本主義の劇場組織の係縛から来ていることは明らかである。素より今回の破壊が資本主義そのものの破壊を意味しないで、却ってその回復の為に、より多く資本主義に依頼する一般形勢を助長するかも知れないし、少くとも劇場と資本主義との絶縁の如きはさし当り空想に過ぎないのは勿論であるが、一面においてその種の営利劇場以外に非営利的な、芸術劇場乃至民衆劇場が興起する好都合は正に到来したと云って善い。破壊後の今日は正にバラック劇場の建設の許されてゐる時代である。破壊前に数百万の建築費設備費を要した為に、大資本を擁せなくては到底手の付けられなかった新劇場の計画が今日ではその十分の一

以下の費用で実行の可能性があった。演劇をブルジョア階級の手から奪還して、一般民衆ものとするには、いまこそその時である。劇場を資本主義の係縛から解放して、芸術本来の面目を自由に發揮せしむる機会は、今日を措いて他にない。この使命のために起たうとする有志の公共団体乃至公共機関が、漸く活動を始めつつある形勢も一部には見えている。我々はその活動の現実化を希望するに止まらない。今こそそうした活動の起されるのが、当然であり過ぎると思うている。

破壊前の舞台に演出されつつあった新劇の多くは、世界大戦争以前の西洋近代劇の脈を追うたもので、大戦後期のものでない事は已に一言した。素より芸術は個性的のものであって、十年、二十年の歳月の経過、乃至時勢の変遷の為に動揺されるべきものではないというのは一面の真理たるを失はない。しかし、同時に卓越した個性の天才が生んだ芸術も、時間的過程が常にこれを古典化しつつある事も亦他面の真理である。世界大戦が人間の心理の上に、また社会の組織の上に一大激動を与え、一大覚醒を促した点ではまさに画時代的であった。今回の大震災は自然の革命であって、人為の革命ではないから、世界大戦に直面した西欧の民衆の受けた程の深遠な感銘を我国の民衆に与え得たとは云えないが、少くとも世界大戦後の西欧の民衆の動揺し混乱して、その渾沌の底から一縷の光明を望んである心理の一端に、触れて行く鍵は慥かに我々の手にも握られたと云って善い。世界の煉獄の苦は日本的にも体験されたに違いない。この体験事実が芸術殊に新劇の上に反映するのは当然期待されなければならない。・・・

破壊前の新劇の基調には、兎角ブルジョア趣味がこびり付いて離れなかった。少なくともブチ・ブルジョアの殻が破れなかった。今回の震災は帝都の多くの人々が、その実生活上に被っていたブルジョアの殻を一挙に破砕し去った。ブルジョアもプロレタリアも一時的に焦土の地平に立って、一時一挙に原始人化した。

所謂文化の仮面が落ちて、荒削りの生きいきした人間に還元された。その間に一面相互扶助の神的な美しい天性が發揮されると同時に、他面同族相食む默的な醜い本性も亦暴露された。一度は坩堝に投ぜられて人間の地金が露出したのである。この前代未聞の、若くは一生に空前の体験が芸術、殊に新劇の上に投影したら、少なくとも在来のブチ・ブルジョアの殻を破ったものが、發生して来なければならない。それは荒削りの野生に満ちた芸術か、若しくは人間愛憐のユーモア芸術か、或いはその他の一特色あるものか、何んにせよ、破壊前のものとは、その風格の相違した新劇が、この体験の中から生み出されて善い筈だと思ふ。

なお破壊前から常に求められていた規模の宏い一大悲壯劇が、大民衆を抱擁する新芸術として出現せなければならぬのは勿論である。小劇場形式の新劇以外に大劇場形式の新劇が続々創作され、また演出される事が、必要であるのは云うまでもない。①

つとに大震災の二年前小山内薫は、創られべき非営利主義の小劇場について述べ、ヨーロッパにおけるその特質と歴史を語っていた。一八八七年パリにおいてアンドレ・アントワーヌが素人俳優の一座を組織し、〈自由劇場〉の名で新進作家の戯曲四つを上演したのが、小劇場の嚆矢とされる。フランスではポオエの〈制作劇場〉やルウシエの〈美術劇場〉がこれに相継ぎ、戯曲の選択、演技の手法、舞台の装置に斬新な試みがなされた。ドイツやポーランドでも小劇場が誕生したあと、一八九〇年ロシアでモスクワ芸術座が創立され、動乱と革命の最中

小劇場の革新的な特質（小山内薫「小劇場と大劇場」）

〈小劇場〉というものの出来た来た理由はどこにあるか。〈小劇場〉の「存在の理由」は何にあるのかと申しますと、先ず第一が舞台と見物席とを近いものにする―即ち役者と見物とを親密な関係に置くところから起って来ています。〈小劇場〉運動の始まるまでは舞台と見物が余りに隔離していた。・・・それ故近代の自然主義的な、または日常生活的な戯曲を芸術的に演ずるには多くの不便と不可能があった。それが〈小劇場〉というものの案出で、一部の解決を見たわけです。第二には普通の劇場ではやれそうにもない商売向きでない戯曲を心配なしに演ずるという事、第三には上演目録を作って、それを一日変りに演ずる制度（即ち同一の狂言を毎日続けてやらないという制度）と見物に座席の予約をさせるという制度（即ち選ばれた見物を集める制度）を置くという事、第四にはいろいろ変った舞台装置をして見る一種の舞台研究室にするという事、先ず大体そういった理由から生れて来たのが〈小劇場〉の運動なのです。

それ故〈小劇場〉というものは、「非営業的」であるというのが、その第一の要素で、見物を大勢呼ぼうとか、大儲けをしようとかいう事は、全然考慮に入れていないのであります。詞を代えて言えば、〈小劇場〉

① 小山内薫「小劇場と大劇場」（『小山内薫戯曲全集』、未来社、一九六五年。第二卷〈築地小劇場篇上〉

二六―二八頁。）

というものは「劇に対する愛」から起ったもので、「利益に対する愛」から起ったものではないのであります。最近バリーに於けるこの種の運動で世界的の名譽を得ているコロンビエ劇場のジャック・コボオなどは、明らかに自分達が「営業的劇場」の敵である事を宣言しています。それ故見物席も少ないのが普通で、先ず七、八十から三、四百が留まりになっています。そして、この種の劇場に集まって来て、働いている連中は、役者でも、戯曲作家でも、舞台装置家でも、電気技師でも、舞台監督でも、そんな同じ芸術的な動機と感激を持っているのです。簡めて言えば、〈小劇場〉というものは常に芸術としての劇の「研究室」でなければならぬのです。それが〈小劇場〉というものの最も重大な任務なのです。

①

ヨーロッパからの帰途練り上げた構想に小山内の賛同を得た土方与志は、団員の結集と劇場の建設に着手する。劇団の中枢は小山内を含む同人六名であって、自由劇場以来の盟友たる市川左団次は、築地への参加を固辞したとされる。

築地小劇場への設立準備（『演出者の道―土方与志演劇論集』）

十二月の終わりに私は神戸に着いた。その翌日すぐに大阪に住んでおられた小山内先生を尋ね、帰国決意以来の私の構想を話した。小山内先生は非常に喜ばれて、私が遠慮して持ち出した顧問になっていたく

① 小山内薫「小劇場と大劇場」（『小山内薫戯曲全集』第二卷、二五頁。）

いう要請を断られて、同人の一人として参加しようと語られた。この会見で始めて私の劇場建設の希望は実現の第一歩を踏み出すことが出来た。早速帰京の途についていたが、横浜駅辺りにはまだ煙りや死体のおいさへ感じられた。東京に着くとこれも一面の焼け野原で、方々ヒビの入ったレンゲ建ての私の家は、避難して来た親戚や知人でごった返していた。

早速私の構想の中にあつて、小山内先生の承認をも得た、今後いっしょに仕事をして貰う人たちを集めた。そのなかには故友田恭助君がいた。彼とは中学生時代、二人の別荘が茅ヶ崎にあつたので、夏休み毎に南湖座―友田君やその大勢の従兄弟達のために出来ていた茅ヶ崎南湖在の別荘の松林のなかに建っていた物置兼踊り屋台である―で近隣の別荘客や地元の漁師のおかみさんを観客として、茶番や一幕物等を演じて以来の友人である。その後友田が早稲田に進んでから、水谷八重子さん等と若者座を組織したり、畑中蓼坡氏の指揮する劇団に属して、ユニークな俳優としてその才能を認められていた。私は彼を第一に私の協力者として迎えることにきめていたのであつた。友田君は築地小劇場でその名演技を發揮し、また愛妻田村秋子を得た。彼が上海事変に駆り出すされて非業の死をとげたことは、今さら惜しみきれない。幸い友田君の快諾を得て、小山内先生の次に彼を同人として入れた。

その他に私は慶大劇研究会や帝劇の裏方として活躍していた浅利鶴雄君や、有楽座でチェホフのマモメ等を初演した汐見洋君、私の模型舞台研究会や舞台の会以来の友人の和田清君等を同人に迎え、時々大阪から上京される小山内先生を交えて劇場実現の仕事を始めた。

まず最初の仕事は、焼跡に土地を捜すことだつた。浅利君や和田君と私はドイツ以来のニッカー・ボッカーにアルバイター・ミュッツェー後の築地帽のモデルとなつたドイツ労働者のかぶっている烏打帽子のよう

なもの―をかぶって毎日東京都内を歩き回つた。新宿にも神田にも目ぼしい土地はいくつもあつた。たしか三十数カ所予定地を得た。まず一番手頃だと思われたのは駿河台であつて、この土地を目標に建築プランを作り出した。名前を駿河台小劇場という事にし、ブループリントも出来た。

ところが突如、当時これも溜池の焼跡にバラックの演技座を立てて、沢田正二郎氏の新国劇をかけて、大儲けをしていた劇場主の初山半三郎氏から築地二丁目の持土を使わないかという申し出があり、急にそこを借地する事になり、建設に取り掛る事になった。すでに設計図は出来ていたので、バラック建ての劇場は着々と建ち上つて行つた。われわれは毎日建築上に行くのだったが、銀座三丁目の四ツ角に立つと、河原崎の手紙にあつた通りの、鉛のごとく曲がつた鉄骨をおびやかしている歌舞伎座の廃墟をのこして、新しい木造の劇場の骨格が毎日形をととのえながら一面の焼跡のなかに建っているのが見えた。「駿河台小劇場」という名称も急に「築地」に変わった。①

かくして結束した築地小劇場の同人は、まもなく豊かな演劇の経験有する青山杉作に参加を要請した。踏路社の興行において好評を博した青山は、友田恭助らのわかもの座公演や蒲田における映画芸術協会の撮影に寄与したあと、震災復興を祈る新劇の企画にも加わつていた。知られざる青山の回顧録は、震災前の各劇団から築地小劇場に至る道程の貴重な証言である。

築地小劇場結成への参加（青山杉作「回想記」）

関東大震災によって東京の街はほとんど焦土と化し、劇場の多くを失い、人心も安定しないという状態なので、すぐ芝居を始めるといようなわけにも、なかなか行かなかった。映画の方も『山語らず』が未完に終わったときのメンバーが散らずにいたので、一種の際物として震災を題材とした一、二を製作してはみた

が、資金もないことだし、あまりいいものには出来上がらなかった。その年の十二月ごろだったと思う。焼け残った牛込の神楽坂倶楽部で、芸術座が『殴られる彼奴』（アン・ドレーエフ作）を上演するというので演出を引き受けた。震災後久し振りの新劇で、なかなか評判が良かったと憶えている。思い出せる配役としては、コンスエルラⅡ水谷八重子、彼奴Ⅱ汐見洋、男爵Ⅱ浅野進治郎、ベザノⅡ金平軍之助、ジニーダⅡ室町歌江などの諸君。東屋三郎君がマンツイニ伯爵だったかと思う。なお、無名の曲馬団の女のひとりとして田村秋子さんが初舞台？として出演していた。

そのあとで年が変わってからだと思うが、まだ寒いうちに『ミンナ・フォン・ベルンヘルム』（レツシング作）の演出をした。この時の舞台は渋谷の九頭龍女学校の講堂だった。当時はなにぶん劇場がないので、こういう講堂などを利用したものだ。出演者は男の役に法政大学、女の役は東京女子大の学生たちだった。・・・なにぶん当時の事情なので、衣裳などはほとんどありあわせの現代もので間に合わせた。そのときドイツから帰朝したばかりの土方与志氏が、おおかみの外套を着て見物に來られ、「テンポがあつて非常に面白い」などと批評してくれたことを思い出す。

さてその後はこれと言って仕事もなかったもので、この際しばらく故郷に帰り、改めて勉強をしようと思ひ立った。それで演劇書を集め出したり、女中に閑を出したりし、荷物をまとめて家をたたむことにした。

いよいよ東京を引き払おうとしたところのある日、和田精君と浅利鶴雄君とが訪れた。そして土方与志氏や小山内薫先生を中心として企画されている築地小劇場の仕事を、一緒にしないかと誘われたのである。私としても故郷へ帰ることが必ずしも本意ではない。仕事さえあれば、というところなので、さっそく荷物をほどこうと思ったが、もうその家には住めなくなっているので、代々木の友達の家の離れを借りることにして、また東京に腰をおちつけた。

しかし、この際私には考えるところがあった。というのは、はじめ俳優を志していた私だったが、いつの間にか演出者の方にまわされてしまっている。今ではどうやら俳優の教師になったという格好で、たまたま自分の演出した舞台に出ることがあっても、俳優として役にとけ込むことが困難になり、どうも舞台から遊離するものがあるのを、痛感していたところである。それで私は、築地小劇場に参加できるならば、俳優として参加することにさせてほしいと申し入れたのだった。

築地小劇場の創立におくれ馳せながら参加した時には、築地二丁目に建設中だった小劇場もほとんど竣工に近く、開演前の整備に忙殺されていた。一方小石川林町の土方邸ではゲーリングの『海戦』の立稽古がいまやたけなわであった。・・・稽古は朝から晩まで続けられた。天気の良い日の休み時間には、広い庭の芝生の上で、みんなでグルクローズのミュージックをやったりした。稽古が終わると、食堂でビールを飲み、椅子テーブルを片付けて踊ったりして楽しんだ。土方、浅利鶴雄、和田精、岩村和雄、友田恭助、汐見洋、東屋三郎、藤輪欣司、千田是也、竹内良一、小野宮吉、北村喜八、高橋邦太郎、河原侃二、花柳はるみ、山

本安英などの諸君がそのころの思い出の仲間であった。ややおくれて夏川静江、田村秋子などが加わった。千田君は当時からなかなかの酒豪で、そういう酒宴ののちいちばんあとまで踊りぬくのは、いつも十九歳の千田君と私であった。

築地小劇場運動に加わったのち、はじめて私は小山内薫先生に逢った。当時大阪のプラトン社で『女性』という雑誌の仕事をしておられた先生のもとを、劇団の連絡のためにお尋ねした。それまでも劇場の廊下などでときおりお見掛けしたことはあったのだが、親しくお話ししたのは、この時が初めてであった。その日先生はちょうど何かの御用でマキノ撮影所にお出かけになるところだったので、私もご一緒した。そしてその時、何のわけだか忘れてしまったが、先生や牧野省三と並んで私もはいつている記念撮影には衣笠貞之助氏の姿もある。①

東京美術学校の図案科学生であった吉田謙吉は、劇団踏路社のポスターを描き、大地震の二年前卒業制作として油彩「ロココの誕生」を仕上げた。その後市村座における創作劇場の旗あげ、土方与志演出の『指曼外道』に出演し、その機縁もあって築地小劇場の創立に参加する。俳優陣の手薄によってその役をもになうが、舞台装

① 青山杉作「回想記」『青山杉作』三二―三五頁。

置の要員である吉田は、稽古場たる土方邸の多彩なロココ風家具にまず魅了された。①

小劇場開演への舞台装置とポスター（吉田謙吉著『築地小劇場の時代』）

第一回公演の『海戦』の稽古が進められている。「弾丸のような」といわれたように、テンポの早いセリフが、飛びかうようにきこえてくる。舞台装置と同時に、第七の水兵として出演することになっていたばかりは、自分のセリフのきっかけ近くなつてくると、急いで二階へ駆け上がった。①

こんどはその部屋でそのまま、舞台装置のデッサンを書きつづける。開場ポスターのデザインも急がなければならぬ。そのためにクレオンなどでも描けるので、開場ポスターはクレオンで描くことにした。一つには従来のポスターとはまったく異なった新鮮さで、アッピールさせようと思ったからであった。小道具のいくつかの弾丸も、それを抱えて演技しやすい寸法を、割り出さなければならぬ。舞台に敷く黒い地がすりにも、表現派風のタッチをつけなければならない。衣装のよごしもある。すべて演出者土方与志との打合わせを欠かさず、デザインが完成するまでにおよそ四ヵ月近くかかった。・・・

そのころ地鎮祭もすでにすんでいて、築地小劇場の建設工事は着々進んでいた。震災後五年間だけはとくに本建築でなくとも、ばらつく建てが許されていたことが、一面築地小劇場の建設を早めたのだった。

① 吉田謙吉著『築地小劇場の時代―その苦闘と抵抗と』八重岳書房、一九七一年。二七―二八、三二―三三、五〇―五二頁。

外装の足場のとれたのはいつであつたろうか。観客席あたりの屋上に、換気塔が突き出ているのが、かなり遠くから見えるのに気が付いた。あれに「築地小劇場」と書いてはどうか、というぼくの提案で、さっそうペンキ屋を呼ぶことになった。・・・

開場と同時に思ったと思うが、ぼくのデザインした「築地小劇場」と染めぬいたベナント型の、天地三メートル近い大旗を、劇場の表がかりに、建物と直覚に突き出して取りつけた。・・・

正面の三つのアーチのうち、左手の二つのアーチは観客の出入りのためになっていて、右手の一つは同じカーブのアーチでこまれた壁だが、そこには毎公演のホスターを貼り出すようになった。そのホスターは模造紙を三枚つぎだかにしたもので、毎公演ごとにほとんど大部分ぼくが手描きで描いた。一公演終わると、すぐつぎのレパトリーのポスターと貼り変えるので、紙のはがしたあとが歴然と残っていた。①

大地震のため人形芝居の準備を中断しながら、それでも千田是也は十月の下旬知人の邸宅を借り、『アグラヴェーヌとセリセツト』の試演会を催した。兄の伊藤熹朔らが人形つかいにあたり、麻布の会場へ招かれた約四十名には秋田雨雀も含まれる。朝鮮人騒ぎの受難から辛うじ脱した千田は、大杉栄と平沢計七の殺害を知り、その背景をも推察する。社会主義や無政府主義に目を開き、クロポトキンの著作『パンの掠奪』などを読むのはこの

① 吉田謙吉著『築地小劇場の時代―その苦闘と抵抗と』五四―五五、六八、七七一七八頁。

時期からである。① 築地小劇場の設立に参じた彼は、演劇の勉強に専念し、当初は俳優でなく、演出家を志望していた。

小劇場開演への作業と訓練（『もうひとつの新劇史―千田是也自伝』）

土方先生が急にドイツから帰られて劇場をお建てになるという話を私がいちばんはやく耳にしたのは、建築をやっている次兄の鉄衛からだった。震災で小石川林町の土方邸の大きな煙突がくずれて屋根をつきやぶり、壁に大きなヒビがはいったとかで、その修理や、分割整理中の土方家の地所の基礎工事や塀づくりの御用を、この兄がずつとつとめ、新しい劇場の敷地さがしや基本設計にも、引きつづきご相談にのっていたおかげである。

どうしても芝居の仕事をしたいというのなら、思いきってこの新しい劇場で働かせていただいたらと鉄衛にすすめられた。私は大いに勇みた。震災のあとで、なにか汗まみれになれる実地の仕事やってみたくてウズウズしていた時だったし、長男がわりの鉄衛の口添えとあれば、父母を納得させるにも都合だったからだ。こんな話があったのは、まだ震災の年の暮れのように思うが、劇場創立事務所二毎日通うことになったのは、年が明けてからだっただろう。

創立事務所は土方邸の地下室にあった。食堂のわきの階段を降りて行くと、まずつきあたりに、まえに模

① 千田是也著『もうひとつの新劇史―千田是也自伝』六〇―六三頁。

型舞台のあった四坪か五坪の部屋があり、模型舞台の機構はもうとりこわされていたが、小山内先生が震災前に大阪へ移られるときあずけて行かれた厩大な蔵書や、土方先生が外遊中に集めて来られた何百冊もの演劇書が、本箱につめたまま部屋いっぱいに積まれ、大工さんが四方の壁に本棚をつくっていた。廊下をはさんだ階段の右手は十三、四坪の大きな部屋で、私なども手伝って、そこへ事務机や本箱や応接セットなどを入れ、まず事務所兼アトリエをつくった。・・・

劇場創立事務所への舞台転換のお手伝いがひとわたりすむと、私は小山内、土方両先生の蔵書の整理を仰せつかった。この地下室に積んであった分のほかに、二階の土方先生の書斎にも、四間ぐらの片方の壁いっぱいに、本がならんでいた。芝居に関するかぎり、実にいい、珍しい本がやたらにあり、それを読ませてもらえるだけでも、ここへ来た甲斐があるような気がいた。別にいつまでもと急つかれぬのをさいわい、みんなが忙しそうに立ち働いているなかで、私は拾い読みをしたり、自分でノートをとったり、リストをつくったりしながら、のんびり本の整理をやっていた。・・・

ここへ通い出した時分には役者をする気は全然なかったこと―ただ漠然と芝居の勉強をしたい、できれば演出もやれるようになりたいとしか思っていなかったことだ。そのうちいつか、演劇の基本は俳優の芸術であり、よい演出家になるには、まず俳優の芸術をきわめねばならぬときづいたといえばおあつらえ向きだが、べつにそんなおぼえもない。やはり創立当初の人手不足のために若くて五体さえ満足ならばと間にあわせてに狩り出され、こっちもそれだけのつもりで、物は試しにやって見ただけというのが真相らしい。

どうせやる以上は、と友田、汐見、東屋などの先輩連中や、その頃ボツボツ集まりはじめた竹内良作、山本安英、田村秋子など、ほんとうに俳優志望の研究生たちにまじって、私も基本訓練をやりはじめた。研究

生ではなかったらしいが、夏川静江さんも早くから加わっていた。土方梅子夫人も美容のためとかで、いっしょにやっておられたのをおぼえている。

しかし、この基本訓練がいつ頃からはじまったか、『海賊』などの稽古にはいる前だったか、それと平行してだったかは、その辺のことははっきりした記憶がない。ともかくある日の夕方近く、みんな水着姿で庭に出て、私には生まれて始めての、その基本訓練というものが始まった。土方先生はなにかも演劇の方へ引寄せて来ねば気のすまぬ、子爵家から嫁にもらった恋女房まで衣装屋にしようような方だったから、お庭もちゃんと野外劇場の形にできていて、かなり広いゆるやかな芝生のスロープの正面に、大きな樹立にかこまれ、刈り込んだ灌木の茂みを袖にした小高い舞台があった。始めたばかりの頃は、その盛土をした舞台の部分が霜解けで練習につかえなかったような気がする。すると基本練習が始まったのはまだ二月中かだったかもしれない。

基本訓練としては、岩村和雄指揮のダルクローズの律動運動と、土方先生がドイツでならって来られた発声・造音練習や呼吸体操をやった。

律動運動の方は、例の三つの準備運動や、十のジェスチュアや、音譜のリズムにあわせて歩いたり跳んだりする練習を一通りやった程度である。岩村さんは外国のバレエ・マスター気取りでとても厳しく、手がのびなかったり、両膝がびったりくっつかなかったり、リズムをまちがえたりすると、男女の区別なく、細い鞭でピシリピシリ叩いた。私のような若い者でも、最初のうちは翌日まで足腰が痛くて閉口した。山本安英さんが黒い長い靴下をはいて、おさげの髪を二つ肩にぶらさげ、水着と靴下の間があくのを気にしながら、神妙な顔をして芝生の上をワン・エンド・トゥー、スリー・エンド・フォーと歩いて行くのが、今でも眼に

舞台や演技への準備は小石川の土方邸で進められ、伯爵夫人たる梅子もスタッフへの応対や世話に忙殺される。彼女の自伝では親しく描かれた俳優の横顔が興味ふかい。第二回公演を終えた第二芸術座からも、友田恭助など数名が移籍する一方、同劇団の中心たる水谷八重子は参加を自重した。

築地小劇場へのスタッフ(『土方梅子自伝』)

与志が帰国して、六ヵ月ばかりのわずかの日数で、劇場建設と劇団の結成、上演へとこぎつけるのですから、そのテンポの早さは驚くほどです。私どもの毎日がどんなにあわただしかったか、ご想像いただけるでしょう。与志が帰国した時は、大震災で焼け出された加藤家の祖父母を始め、親戚の人たちがまだ寄寓しておりましたが、やがてそれぞれ別荘などに落ちつきました。

私は親戚の世話が終わったと思う間もなく、新しい劇場と劇団設立の準備に忙しい与志を手伝って、てんてこまいの毎日になりました。毎日、毎日、朝から夜中まで大勢の人が出たり入ったりで、家中はひっきりかえるような騒ぎでした。庭の芝生では海水着を着てダルクローズのリズム体操を習っている人たちがいるかと思うと、家の中では発声をやっている人たちもあり、別の部屋では上演する三つの芝居の稽古、地下室

① 千田是也著『もうひとつの新劇史―千田是也自伝』六五―六六、七一頁。

の模型舞台研究所で装置や照明の研究、模型の作成に忙しく働いている人たち、庭も家もまるで戦場のようなでした。

食事時にはこの方たちに食事を出し、ビールを出す。一ダースくらいのビールはすぐなくなってしまう。酔って衣装の布の山にもぐりこんで寝てしまう人もいる。私は第一回の出しものの衣装も作らねばならない。敬太付のお手伝いさんはおりましたが、やはり母親としていろいろ面倒をみなければならぬ。ほんとうに一月から六月の開場の日までの忙しさは言葉につくせないほどでした。・・・

当時の日本はまだ新劇は目新しく、そのうえ芝居や役者に対して偏見のあったじだから、特に女優さん探しに苦労しました。客員として夏川静江さんをお願いするとともに、研究生に山本安英、田村秋子のお二人を迎えることができたのは幸運でした。

山本さんは小山内先生と与志が松竹女優養成所の講師をしていた時の生徒さんでした。帝劇で小山内先生の『第一の世界』上演の際、左団次さんの娘訃に拔擢され、新人女優としてデビューされたのですが。養成所が解散したため、家庭に帰って居られたのを先生と与志がひっぱり出したのです。

田村さんは作家の田村西男さんのお嬢さんで、文士劇に出られたことがあり、才能のある方と聞いて交渉しました。その頃は女優さんといっても、いまの新劇志望の若い人たちとう雰囲気も違いました。山本さんが見えた時はおさげ髪にセーラー服でしたし、田村さんも「父に連れられて土方先生のお邸のお伺いした時の私は、ひっこめ髪に、銘仙の着物、メリンスの花模様の帯に、日和下駄といういでたち」(田村さん談)でした。

新しい劇場と劇団創設が新聞などで報じられ始めると、新劇志望の青年の来訪もありました。築地発足の

年の正月頃だったと思いますが、私が玄閣に出ると、詰襟の学生服姿の青年が、もじもじしながら、「芝居をしたいと思いますので、先生にお目にかかりたいのです」と言いました。服装から判断して「学生さんですか」と尋ねますと、「浅草で働いている者です」と、気弱そうにその青年ははにかみました。後に天才的と言われた名演技者丸山定夫さんは、このようにして築地の研究生になられました。

いよいよ築地に劇場が建て始められると、まだ大震災の傷のいえない東京のバラック建ての中に、ひときわ高く目立つ建物が銀座のあたりから見えました。電車を降りると焼野原の中に骨組みからだんだんと形を整えていく築地小劇場が目に入ります。劇場は命あるもののように新しい演劇をめざす私たちを勇気づけてくれました。開場が近づくと、

理想的小劇場の誕生

築地小劇場

真摯なる演劇研究機関の確立

とスローガンを描いたポスターが、あちこちに張り出され、また新聞や雑誌には小山内先生や与志たちの論文や談話が紹介されて、いよいよ雰囲気は盛り上ってきました。①

市川左団次による俳優養成に応募し、帝国劇場で小山内薫作『第一の世界』に抜擢された山本安江は、築地小

① 『土方梅子自伝』八七―八九、九三頁。

劇場における最初の女優となった。生来の天分を熱意と努力で磨き、彼女は後年とりわけ木下順二作『夕鶴』の名演技によって、東山千栄子とともに国民的演劇人と称えられる。

土方邸での演劇訓練（山本安英著『新版 歩いてきた道』）

歌舞伎、新派に対する当時の日本近代劇運動は、確かに非常に微弱なものだったのです。既に一九〇六年坪内逍遙先生の文芸協会、一九〇九年小山内先生と市川左団次さんによる自由劇場とによって口火を切られた第一期近代劇運動は、その後劇団の数も増え、多くの戯曲を上演し、それなりの努力は立派に展開されていたのですが、何と言ってもその社会的な力は弱く、技術の程度もはつきりした基礎をまだ持てなかっただけに低いものであり、歌舞伎や新派の方々からは素人芝居という眼で見られている状態でした。そこにあの大地震が起ったのです・・・

一九二四年一月に運動開始の決意がなされてからいよいよ初出演の幕があくまでの五ヵ月間は、想像以上に多忙な準備活動が持たれました。まず小山内薫、土方与志、友田恭助、汐見洋、和田精、浅利鶴雄という六人の同人組織、俳優、舞台装置家、舞踊家等の糾合、俳優の基礎訓練、それと併行して敷地の選定、法律上の手続きの問題、建築プラン、舞台設備や観客席の研究、向う一年間の演出目録の用意などなど。

俳優は汐見さん、友田さんに、先の関係から私が呼ばれ、そのほかに丸山定夫、千田是也、竹内良作（のち良一）、藤崎和正（のち欣司）さんたち、それにたしか江原さんという女優さんはいりましたが、すぐ姿が見えなくなり、私はしばらく一人だけ男優さんたちのあいだにまじって、ダルクローズという舞踊の基

本体操の練習などをしていました。そこへ田村秋子さんが加わってこられたので、ほっとしたのを覚えています。・・・

今までの劇団に対しての全く新しい出発を、私たちはこの小さな劇場から始めて行くのだという希望と興奮とが、小石川林町の土方先生のお屋敷で準備と勉強とを進めて行く私たちの間にみなぎっていました。当時まだ伯爵だった土方先生のこのお屋敷は、どっしりした古風な洋館で、以前明治天皇の訪問を受けたことなどもよくあったお家と聞いていました。広い芝生のお庭や、小山内先生の蔵書も預かってぎっしり演劇書の詰まった地下室があり、別棟のお母さんが住んでいられる日本館の方からは長唄の三味線が聞えて来るようなこともありましたが、今はまるで戦場のような騒ぎです。劇場の創立事務所でもあり、稽古場でもあり、研究室でもあり、そして同時に食堂でもあり、時には宿泊所さえもあるこのお宅の、あちらの部屋では日本最初の表現主義演出である『海賊』の稽古に、男優さんが弾丸のような速さでせりふを絶叫していると思うと、こちらの部屋ではどなるような声で議論が沸騰しています。つい先日まではラジオ巻きの髪に結って中国服などにとって、学校に通う時など馬車に乗っていられたという土方梅子夫人が、衣装係の女の人達と一緒に柳原などの古着屋を歩きまわり、大きな風呂敷包みを背負ってかえって来られる姿も、私達を感動させたものでした。

毎日毎日協議や勉強や稽古や、その他いろいろの用件に一人一人が追いまくられ、いつしか夜になって一所に食事をとり、男の人たちが顔のはいりそうな大きな外国のジョッキで乾杯している最中に、のちに築地の小屋の正面に揚げられたあの大きなぶどうのマーク（土方久功氏作）が届けられて、一同歓声をあげた時の感激も忘れられません。またあちこちと土地を探した揚句、いよいよ築地に決定し、地鎮祭のあと一同を

連れた小山内先生が、例の片時もはなさないパイプを手し、ステッキの先で示しつつ、ここが舞台だよ、あそこが楽屋だよと、地面の縄張りに従って説明して下さるのを聞きながら、思わず涙を落してしまった時の興奮も忘れることのできない一つです。①

山本に続いて築地小劇場に採用された十八歳の田村秋子は、西洋風の男優ばかりに当初は違和感を覚えた。水着姿のダンスにも、西洋式の会食・乾杯にも驚いたと回顧する。『海賊』での演技に感銘を受け、やがて友田恭助と結ばれるが、女優との結婚に当初友田家では反対であった。②

築地小劇場の研究生に（田村秋子・小山裕士共著『一人の女優の歩んだ道』）

関東大地震で麻布の南座と牛込の神楽坂の演技場のほかは、東京の劇場はすっかり焼け、帝劇も焼けちゃったでしょ。小山内先生は「今さらずぶの素人の研究生からではなく、相当出来た演技者が欲しい」と言っていたら、あたしなんぞ入るずっと前に、帝劇の中堅以下の若い女優さんたちが相当、築地小劇場へ入られることになっていたんです。そんなわけで最初女優さんはわりに募集しなかったらしいんですよ。ところが帝劇がまた再建することになったので、帝劇の若い女優さんたちがみんな元へ戻っちゃったもんで、誰も

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』二二―二五頁。

② 田村秋子・小山裕士共著『一人の女優の歩んだ道』二〇―二三頁。

いなくなっただんです。山本安英さんが左団次の俳優学校にいらっしやった時の、小山内先生と土方先生の関係で一人残ってらしたんです。で、どっかに女優はいないか、と探されただんです。別に新聞などに募集の広告などを出したわけじゃなく、コネで探されただしんです。あたしの場合には、女でありさえすれば、誰でもいいからって、いうので誘われたらしんです……

ちょうどそのころ（水谷）八重子さんが第二次芸術座を作られたんです。あたしは八重子さんとは前の通話会で交友だちになったものですから、八重子さんのところも女優さんがいないので、遊びながら出ないか、いま『人形の家』のけいこをしているから、一度見にいらっしやい、って言われたので、その牛込通寺町の八重子さんのお宅に初めて行っただんです。そこで青山先生と友田に会っただんです。八重子さんと三人が瀬戸の火鉢に手をかざしながら、『人形の家』の本読みをしていたんですが、あたしその時の本読みを聞いてびっくりしたんですよ。その前に新劇だって見ることは見てるんですけど、せりふの調子が今まで聞いたことのない調子だったので。今まであたしの知ってる新劇のどの芝居のなかのせりふよりもスピードが、テンポがあるんで。その時あたしは小寺融吉さんの『真間の手古奈』の村の娘の一人をやりました。そのあとシヨウの『軍人礼讃』、アンドレーフの『殴られるあいつ』にできました。その後大正十三年四月上旬に築地小劇場へ研究生として入れていただいたんです……

あたしが築地小劇場の研究生になったんで、呼ばれて小石川の土方先生のお宅へけいこを見に行ったら、男の人がみんな先生のおうちの広間で『海賊』をやっていましたから。役者って妙なもので、どんな男でも新しい女が見物に來ると、この人に見せようって気になるらしいんですね。男の人たち、これ見よがしにやるんですか、そのせりふのテンポの速さかげんときたら、まるで機関銃の弾丸をパンパンパン撃ってるよ

うにやっただんですよ。それを見てても一つもせりふはわからないんですけど、あたしもあんなに感動したことはないですわ。びっくりしちゃっただんです。みんなの気負った意欲って言うのかな、とにかくその意気はたいへんなものでしたね。ああいう意気っていうのは、その後にもあんなに見ないんじゃないかと思うんですよ。ガーガーやりやいいっていうもんじゃないんですけど、『海賊』という芝居はたまたまそれに合ってるでしょう。最後にはみんな死んで行んですけど、

あたしは開場の一月半くらい前に築地小劇場へ入っただんで、その前に入られた方は、多少はずっとその基礎教育をおうけになったにちがいないんですけど、あたしの頃になるともう公演にかんしての準備と稽古のほうが主になっちゃっただんですね。発声法とかグルクローズなどは教わりましたけれど、ほかの部門のものは別に致しませんでしたわ。先生方にしてみれば、基礎教育をやりかかったでしょうし、あたしたちも基礎的なものをしっかり身につけたいと思ったのですけれど、結局みんな次から次への公演に追われたと思うんですよ。

①

小劇場開設を準備する土方邸では演技の稽古や舞台の準備が進められるとともに、演劇全般についての研究会も開かれていた。笈川道子の自伝でよれば、おそらく同人和田清と父親との繋がりによって、十四歳の少女もこれに参加したのである。房総海岸で罹災した笈川一家は、やがて東京に帰ったものの、震災後の世相で貧窮と困

苦は募るばかりであった。敬虔な心でこれに耐える家族に希望の光が射したは、長女道子が築地へ参加し始めたときである。

土方邸における少女研究生（及川道子著『いばらの道』）

傷ましい記憶を深く刻まれた北条の町を引き上げて、私たちの一家は東京へ戻ってまいりました。けれども、打ちひしがれたような、みじめな姿で再び帰って来た私たちの上に、東京の生活は一層試練の鞭を振りかざしていたのでした。・・・一家の生活はいよいよ苦しくなるばかりで、父や母の心痛は夜も昼も絶えないほどでした。ことに妹の雪子が生まれました震災の翌年から、私が小学校を卒業する頃までは、この青山時代でも一番困った時でした。・・・

「どんなに貧しくたって、正しい心を以って皆んなが仲よく暮せるならば、それが世界の中で一番幸福な家だ。正しくて、しかも貧乏だということは、決してはずかしいことではない。もしその貧しさが恥ずかしいなどと思うことがあるなら、その人間は卑屈なのだ。」夕食の後の団樂の席で、そう云って聞かせる時の父の声は、厳かな響きをもって、私たちの胸をどんなに強く打ち励ましたでしょう。

「それでは世界で一番幸福な家に相応しいように、仲よく皆んなで、楽しい歌を歌いましょう。」母の声の終わらぬうちに、私たちは清く朗かな声で歌い出しています。「きれいな 白いあの子羊は よき飼主に日々愛せらる」

このような忍苦に満ちた生活と、つつましやかな清い幸福のなかに、地震の年が明けると、私たちには思いがけない大きな幸福が見舞ってきました。それは震災の年の十二月に帰朝された土方与志先生が、翌年の一月から御自分のお屋敷の地下室で、劇の研究会を開かれたので、私も和田清先生につれられて、その会に参れるようになったことです。千田是也さんや吉田謙吉さんも、やっぱりその会で岩村和雄先生について、熱心にお稽古をしてもらっておられました。

前にも書きましたが、私の父は芸術に対して深い理解を持っていましたし、・・・母もまた芸道に深い愛着と理解を持っておられましたので、そのような両親の手に育てられた私は、小さい時分から自然と芸術に對する愛と親しみを持っておりました。そして小学校時代にも、学芸会などではいつも童話劇を主演したり、また独唱などをいたしました。

それですから土方先生の研究会に入れて戴けた時の嬉しさは、言葉にも言い表せないほどでしたし、またこの研究会に通うようになってから、先生の導きによって、私の生涯をその道の精進に捧げるようになった、大きな動機を作ったわけです。

こうして私は自分の前に大きな希望の道が開かれたような、輝かしい思いを抱きながら、まだ傷の癒りきらない胸に繃帯をし、その上を真綿の入ったセルのワン・ピースで包んで、毎日熱心に通っていましたが、そのうちとうとう私が晴れの舞台に立てる日がきました。

その当時は小劇場運動、言いかえればアマチュア劇団の一番盛んな頃で、大学生や勤人などの間にたくさんのおそう言った劇団が結成されたように聞いていました。そのうちの一つに《青騎手》という小劇団がありまして、これも和田さんの御紹介で知ったのですが、稽古場にお店の土間を貸して上げたり、父の知っているお寺を借りてあげたりしたので、度々お稽古を見せてもらったし、また保険協会のホールなどでの公演に

度々出かけて熱心に見たものでした。

その翌年でしたか、築地小劇場が創立されて、ここにこれらの小劇場運動も集中されたかのように、段々消えてなくなったように考えます。①

低俗化として小山内薫から批判される浅草の興行界からも、築地小劇場の旗揚げに数名が参加した。帝国劇場における新劇の不振のあと、浅草寺界限の日本館あるいは金竜館における『カルメン』、『椿姫』、『天国と地獄』が人気を博する。その後震災で全滅した盛り場を離れ、青島歌劇団や根岸大歌劇団に所属した丸山定夫、小杉義男、水品春樹らはひととき地方を巡業した。

浅草オペラから築地小劇場への参加（松本克平著『日本新劇史―新劇貧乏物語』）

多くの落伍者が（浅草）オペラの凋落とともに剣劇やレヴューに再転向して行ったのと反対に、オペラから築地小劇場に参加していることは興味深い。・・・男優では丸山定夫、小杉義男、舞台監督の水品春樹、女優では若宮美子、月野道代の六人がそうである。

まず丸山定夫である。筑地、新筑地、エノケン一座、PCF、東宝映画を通じて名優と謳われ、広島で原爆の犠牲となった丸山の前身は、広島の大津賀八郎の青島歌劇団時代の弟子であった。そして浅草オペラか

① 及川道子著『いばらの道』六七―七三頁。

ら築地小劇場に参加した。エノケン（榎本健一）はこの浅草時代の親友である。彼は四国松山の医者の子に生まれた。父に逆らって家出し、福岡の大きな家具店の下足番になった。やがて画家を志し京都へ行って車夫になって苦学した。ある日新京極の夷谷座で伊庭孝作、高田雅夫主演の楽劇を見るに及んで心機一転改めて俳優を志したのであった。

丸山は東京へは赴かず、郷里松山の対岸にあたる広島の新天地に転じて、臨時に映画館を改造して青島歌劇団を主催していた大津賀八郎の門を叩いたのであった。採用された丸山はここで朝からピアノをたたき、声楽のレッスンをやり、庭の掃除、炊事の手伝い、楽屋入りをしてからは舞台のこと、みんなの雑用、風呂の釜たき、大津賀の身のまわりまでマメマメしく働いた。オーケストラ十数名のほか俳優その他三十余名で、丸山はみんなに可愛がられた。・・・

ところで若宮美子もこの青島歌劇団にいたのである。彼女は千葉県生まれ、千葉の女学校を出て、浅草の朝日少女歌劇団に加わり日本館に出ていたが、大津賀の広島行きの一行に加わったのであった。そして広島へ行ってから水品春樹と暫く深い関係を持つようになる。

ここで一年ばかり仕事をしたが、大津賀は酒飲みで統率力に欠けていたため、だんだん去って行く人が出て来た。水品、丸山、若宮も東京へ戻って本格的に勉強する必要を感じて、九州巡業にでる一座と別れて上京した。そして水品は広島へ行くまで働いていた日本館の文芸部や金竜館の知人と再び交わり、浅草の周辺を彷徨する。間もなく大正十二年九月一日の関東大震災にあつて浅草の興行界は全滅する。オペラの連中はほとんど大阪へ移住してしまう。大津賀も当時大阪に出ていた。そして浅草から避難したオペラ仲間で、大津賀八郎、柳田貞一を中心にして歌劇団を編成、東北、北海道へ巡業に出発する。丸山も水品もその一行に

加わる。・・・

こうした長いきすらいのあと、浅草へ舞い戻った初夏のある日のことであった。震災前のペラゴロの集落地になっていた浅草ひょうたん池のそばのコーヒー店ブラジルで、丸山と水品は葡萄のマークのついた白い封筒から取り出した、青色の紙に印刷されてある築地小劇場の「御挨拶」をじっとみつめていた。

御 挨 拶

私共同人は此度築地小劇場の建設に着手しました。六月中旬、同劇場竣工と同時に、毎月五日間ずつ築地小劇場演出として責任ある公演を致します。

私共は演劇の多角的な要素とその使命を感じ、芸術の創造と鑑賞の自由のために、出来る限りの設備の完全を期して設計致しました此の小劇場に於て、商業主義の仲介者を排して、私共一同真摯なる研究と努力の結果を発表したいと思います。

猶俳優の養成及一般戯曲、演出の研究機関を同劇場内に並置致します。

何卒吾々一同の微力に対して、親しき御批判と御鞭撻を仰ぎたいと思います。

大正十三年五月一日

築地小劇場同人

丸山はすでに土方与志に手紙を出し、単身小石川林町の土方邸を訪ねて採用され、六月十三日開場の『海戦』その他の稽古に参加していたのであった。こうして丸山の幹旋で、オペラでは丸山よりはるかに先輩であった水品は、おくれて七月十八日に小山内薫に面接し、七月十九日の第六回公演の初日から舞台監督の手

伝いをするようになった。①